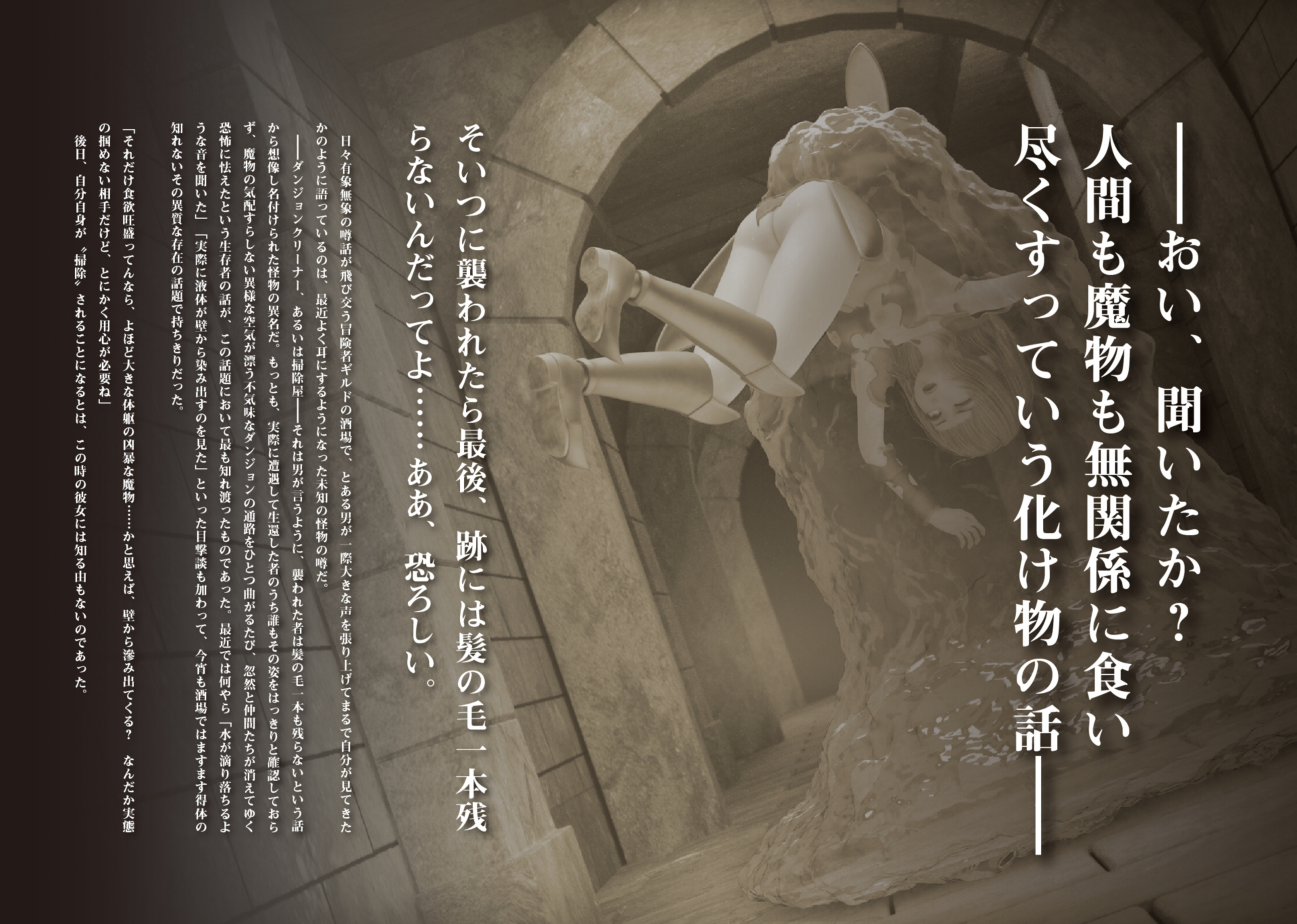
RYONAMON QUEST
～勇者が勝つとは限らない～
リョナモンクエスト特別先行CG集Vol.3
Ryonamon Quest
3D!
H-side
ソフトリョナエディション



――おい、聞いたか？ 人間も魔物も無関係に食い尽くすっていう化け物の話――

そいつに襲われたら最後、跡には髪の毛一本残らないんだってよ……ああ、恐ろしい。

日々有象無象の噂話が飛び交う冒険者ギルドの酒場で、とある男が一際大きな声を張り上げてまるで自分が見てきたかのように語っているのは、最近よく耳にするようになった未知の怪物の噂だ。

――ダンジョンクリーナー、あるいは掃除屋――それは男が言うように、襲われた者は髪の毛一本も残らないという話から想像し名付けられた怪物の異名だ。もっとも、実際に遭遇して生還した者のうち誰もその姿をはっきりと確認しておらず、魔物の気配すらしない異様な空気が漂う不気味なダンジョンの通路をひとつ曲がるたび、忽然と仲間たちが消えてゆく恐怖に怯えたという生存者の話が、この話題において最も知れ渡ったものであった。最近では何やら「水が滴り落ちるような音を聞いた」「実際に液体が壁から染み出すのを見た」といった目撃談も加わって、今宵も酒場ではますます得体の知れないその異質な存在の話題で持ちきりだった。

「それだけ食欲旺盛ってんなら、よほど大きな体躯の凶暴な魔物……かと思えば、壁から滲み出てくる？　なんだか実態の掴めない相手だけど、とにかく用心が必要ね」

後日、自分自身が〝掃除〟されることになるとは、この時の彼女には知る由もないのであった。

VS ダンジョンクリーナー

完全溶解(2)

封印の祠深部へとたどり着いたリヨナは、永遠と続く薄暗いダンジョンの通路を進んでいた。

「おかしいわね……この通路、魔物の気配もなければ、血痕ひとつ無いじゃない。まるでぴかぴかに磨かれたみたい……」

魔物の巣食うダンジョンの通路ともなれば、至るところに戦いの跡が残るものだ。特に深部ともなれば、わざわざ力尽きた冒険者の躯を弔う者もなく、遺骨や遺留品、乾いた血痕などがいたるところに散見されるべくものだった。

「〝掃除屋〟がいるのかしら……」

――ダンジョンクリーナー。リヨナの言う掃除屋とは、冒険者達の間でそう呼ばれている未知の怪物だ。力尽きた冒険者や魔物の死骸に装備品など、その全てを戦いの痕跡ごと消し去ってしまう魔物と言われているが、その姿を目撃した者はだれもいない。

ふいに、リヨナは暗闇の先に不穏な気配を察知した。

「あれは……スライム？　こんなところにまで来て、あんたの相手なんてしてられないのよ！」

目を凝らすと、天井にへばりついたスライムらしき魔物の存在が視認できる。――まだ距離は十分にある。相手は愚鈍なスライムだ。落ち着いて処理しよう――リヨナがそう思った矢先、突然暗闇から大量の〝液体〟が噴出された。

「ぶわ、何これ……いぎゃぁあああ!?」

吐き出されたその液体はリヨナの身体に触れた途端に凝固し、へばりつくと同時に、強い消化液を分泌し瞬く間にリヨナの戦闘能力を奪い、膝をつかせてしまうのだった。

VS ダンジョンクリーナー

完全溶解(2)

「ぎぃあぁァァ！　あぁっ……あぎゃぁぁぁ!?」

数秒の間、まるで地獄の業火に焼かれたような断末魔を上げ続けたリヨナであったが、やがて痛みで気を失ったのか、べちゃりと床に座り込むと途端に静かになってしまった。

「ぁ……ぁ……」

緩く開いたその口からは弱々しい嗚咽が溢れだす。じゅうじゅうと湯気を上げてリヨナの身体はみるみるうちに軟化してゆき、やがて崩れるように前のめりに倒れ込んでしまう。スライムの海に溺れるような格好になっても、もはや呼吸の心配ができるほどの意識も残っていないのであった。

そのスライムは、核を持たない特殊な個体であった。かつて強力な魔物との戦いで瀕死の状態に陥った高名な魔道士が、力尽きる寸前、偶然徘徊していた一匹のスライムによって仕留められた。その際、身体を飲み込まれながらも最後の抵抗でスライムの核を破壊し、相討ちの形での膜引きとなるはずであったのだが、そのあまりに強力であった魔力の作用によってスライムは核を失ったまま復活し、いわばゴーストのように魔力で肉体を操る稀有な存在へと進化を遂げたのだった。

特殊な力を得たスライムは、魔力を駆使して通常のスライムとは比較にならない行動力を見せた。スライムの身体で唯一硬いとされる〝核〟がないという特製を活かし、高い魔力によって自身の身体を変質させて壁や床、天井の内部へまで移動する能力を得たのだ。獲物を待ち伏せては目にも留まらぬ速さで自身の一部を吐き出し、強力な消化液を分泌して獲物を瞬く間に溶かしてしまう。冒険者の肉体を始め装備品や乾いた血痕まで全てを溶かし尽くして糧とするその貪欲さこそが、この特異なスライムが〝ダンジョンクリーナー〟と呼ばれる由縁なのであった。

VS ダンジョンクリーナー

完全溶解(2)

ぺしゃりと音を立て、前のめりに崩れ落ちたリヨナの身体は湯気を立てながらみるみるうちに溶解していった。鎧は完全に溶け、無残にも肌色のゲル状となったその肉体はブクブクと泡を立ててスライムの海へと沈んでゆく。それは、世界を救う筈であった勇者としてはあまりに無残な最期であった。

こうして、全てを溶かしたスライムは、リヨナの体内に宿っていた潤沢な魔力を吸収したことで更に強力な魔物へと進化し、もはや魔王ですら制御がきかない厄介な存在として猛威を振るうこととなった。その扱いに手を焼いた魔王はこの危険な怪物をダンジョン最深部の一角へと追いやり、これ以上ダンジョン内を徘徊しないよう見張りを立てることにしたが、最近ではその見張りが頻繁に失踪するという報告が相次いでいるそうだ。

BAD END

VS ダンジョンクリーナー

内部溶解(皮化)

「そこ！」

暗闇から飛びかかってきた正体不明の物体に瞬時に反応したリヨナは、素早くその身を交わすと同時に手にした剣で飛びかかる〝何〟かを薙ぎ払った。――手応えが、ない!? 振り払われた剣先は空振りしたわけでないが、まるで水を切ったような軽い反動にリヨナは戸惑いを覚える。その上更に彼女を困惑させたのは、自分が斬りつけた筈の物体がビシャリと音を立てて床に広がった後、染み込むようにその場に消えていったことだった。

「スライム!? でもこんな水みたいに溶けるやつ、聞いたことない……！」

これまでに数々の強敵との戦いを乗り越えてきたリヨナだからこそわかる。――これは相当に厄介な相手だ。染み込むように消えていったのは決して倒したからではないだろう。その証拠に、先ほどスライムが消えていった場所には何の痕跡も残っていなかった。おそらく、この魔物は壁や床の中を自由に移動できるのだろう。大陸で発見されているスライム種はその体内に頭脳とも呼べる核を持ち、それを破壊しない限りは倒すことができない。しかし、先ほどのスライムにはその核らしき物が見当たらなかった。

「弱点もなく、水みたいに溶け込んであちこち自由自在ってわけね」

――最悪だ。せめてもっと広い場所で遭遇すれば、リヨナ一人でもなんとか対処できたかもしれない。しかし、この入り組んだ狭い通路では地の利は魔物側にあるのだ。そもそも、壁や床を自由にすり抜ける相手にとっては、いつでもどこからでもこちらを狙い放題であろう。

「こうなったら、魔力の続く限り周囲を焼き払いながら進むしか……」

自身の周辺に意識を張り巡らせながら、リヨナと魔物との間で一触即発の状態が続いていた。こうしている間にも、またどこからともなく湧き出したスライムに襲撃されるかもしれない。――悩んでいる暇はない――意を決したリヨナが炎の呪文を唱えるべく詠唱に意識の集中を移した次の瞬間、突如として鈍い衝撃が走り、顔全体に冷たく嫌な感触が広がっていったのだった。

VS ダンジョンクリーナー

内部溶解(皮化)

「おごぉ!? ごぼガボゴボガボォォォ!!」

自分の身に何が起きたのか、リヨナは瞬時に理解することができなかった。恐らく先程のスライムに襲撃されたのは間違いない。しかし、突如として視界が歪み、水桶に顔を突っ込んだかのように息が出来ず、立ったまま溺れているこの状況は一体……? パニックになりながらも必死にもがき、ようやく自分の頭をすっぽりと覆ったその〝何か〟に手をかけたリヨナであったが、振り払おうと力を込めてもそれは掴む力を吸収するように柔らかく沈み込み、いたずらに体力だけが奪われてゆく。――さっきのスライムに、顔を覆われているんだ――ようやく自身の置かれた状況を理解したリヨナであったが、為す術の無い状態に依然変わりは無いのであった。

あの時床に消えていったスライムは、染み込む様に壁の中を移動して通路の天井へと進み、再び暗闇に身を隠して機会を伺っていたのだ。高等な魔物ほど魔力を感知する能力は鋭い。どれだけ道を極めた魔導師であろうと、魔法を発動するまでの間は無防備だ。この魔物はそれを把握し、魔力の流れが発生する瞬間、獲物の意識が呪文の詠唱に移り変わるその時を間近に潜み狙っていたのだ。

(やばい……息が……)

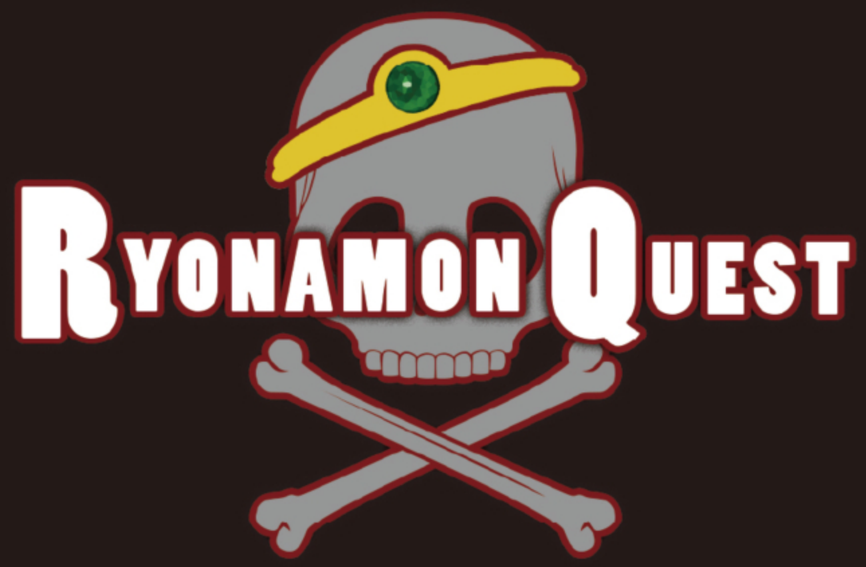
先ほどからゴボゴボと勢いよく肺の中の空気を放出していたリヨナであったが、いよいよ限界を迎えようとしていた。スライムはそんな彼女の様子を見計らっていたかのように、空気の出てこなくなった口腔へ入り込むと、一気にその喉を通り食道を通じ胃の中へと侵入してゆく。

「オゴガボゴガボォォォ!?」

凄まじい勢いで無理やり腹の中に侵入してくるスライムに気道を塞がれ、いよいよ呼吸どころではなくなったリヨナの意識は、間も無く失われようとしていた。

(苦しい……お腹が……熱い……)

限界まで膨れ上がったその腹部は、徐々に内側から熱を帯びてゆく。体内に侵入したスライムが肉体を内側から溶かすべく消化液を分泌し始めたのだ。間も無く、地獄の苦しみを味わうことになったであろうが、その前に意識を失えたことは彼女にとって最後の救いであったのかもしれない。



※注意※

これより先のページは、ショッキングな表現を含みます。

本製品は隠蔽処理を施したバージョンであり、
オリジナル版に関してはリョナモンクエスト公式サイト
にて案内しておりますのでそちらでご確認下さい。

www.ryonaque.com

VS ダンジョンクリーナー

上半身溶滅

「噂の化け物が出るっていうのは、このあたりで間違いなさそうね」

ギルドの酒場で耳にした眉唾な噂話が真実だとすれば、その危険な魔物が生息するという区域はこの辺りであった。――確かに不気味だ。本来であれば凶悪な魔物が蔓延っているはずのダンジョン深部であるにも拘らず、リヨナがこの階層に入ってから今まで魔物の一匹たりとも遭遇していない。

「壁や天井の内側に潜み、動く物は人でも魔物であろうと食い尽くし、毛の一本も残さない……」

リヨナはここに到達するまでの間に、噂話の内容を確認し、未知の魔物への対策を講じていた。

「壁の中に潜んでるっていうなら、魔法で炙り出してやるわ！」

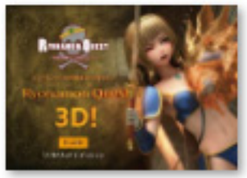
そう言うと彼女は呪文を唱え、通路の果てへと向けて真っ直ぐに進む大きな火球を放出する。すると、たちまちビチャビチャと音を立てて、彼女の立つ先方の天井から色のついた液体が滲み出すように大量に滴り落ちてきた。どうやら、リヨナの予測は的中したようだ。

「見つけた！」

火炎魔法によって炙り出され姿を表したその謎の液体は、一度地面に大きな水溜りを作るとすぐに隆起を初め、あっという間にリヨナの背丈をも超える巨大な正体を表した。

「嘘でしょ、凶悪な魔物って、スライム!? でも、それなら、急所を狙えば……」

リヨナは剣を構えたまま不覚にも敵前で硬直してしまう。――こいつ……核がない？ ――スライムといえば、核さえ破壊すれば容易に倒せる魔物。そんな冒険者としての常識が、彼女の思考と判断を鈍らせたその刹那。目前に聳え立つその巨大なスライムは、ビュンと体の一部を飛ばすように伸ばすと、リヨナの上半身をすっぽりと捉え、咥え上げたのだった。



RQ2020H_Slime2_00.jpg

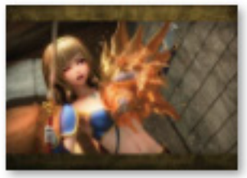
RQ2020H_Slime2_01.jpg

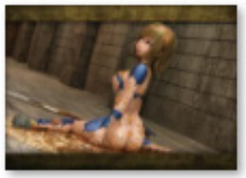
RQ2020H_Slime2_02.jpg

RQ2020H_Slime2_03.jpg

RQ2020H_Slime2_04.jpg

RQ2020H_Slime2_05.jpg


RQ2020H_Slime2_06.jpg


RQ2020H_Slime2_07.jpg

RQ2020H_Slime2_08.jpg

RQ2020H_Slime2_09.jpg

RQ2020H_Slime2_10.jpg

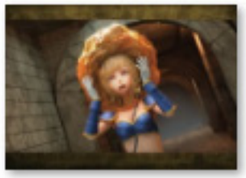
RQ2020H_Slime2_11.jpg

RQ2020H_Slime2_12.jpg

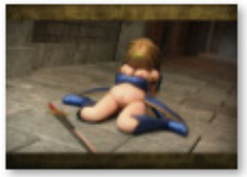
RQ2020H_Slime2_13.jpg

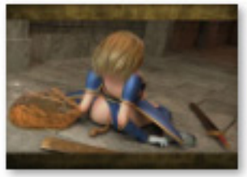
RQ2020H_Slime2_14.jpg

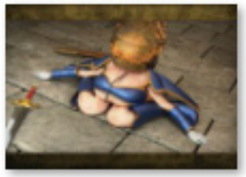
RQ2020H_Slime2_15.jpg

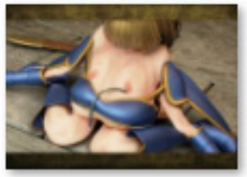

RQ2020H_Slime2_16.jpg

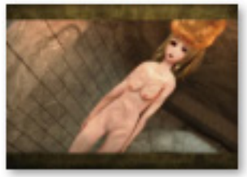
RQ2020H_Slime2_17.jpg

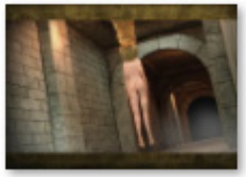

RQ2020H_Slime2_18.jpg


RQ2020H_Slime2_19.jpg


RQ2020H_Slime2_20.jpg


RQ2020H_Slime2_21.jpg


RQ2020H_Slime2_22.jpg

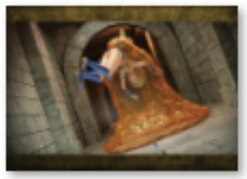

RQ2020H_Slime2_23.jpg

RQ2020H_Slime2_24.jpg

RQ2020H_Slime2_25.jpg

RQ2020H_Slime2_26.jpg

RQ2020H_Slime2_27.jpg


RQ2020H_Slime2_28.jpg

RQ2020H_Slime2_29.jpg

RQ2020H_Slime2_30.jpg

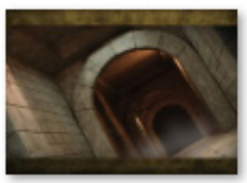
RQ2020H_Slime2_31.jpg

RQ2020H_Slime2_32.jpg

RQ2020H_Slime2_33.jpg

RQ2020H_Slime2_34.jpg

RQ2020H_Slime2_35.jpg


RQ2020H_Slime2_36.jpg

RQ2020H_Slime2_37.jpg

RQ2020H_Slime2_38.jpg